

青年期女子の母性意識と幼少期における体験の関連

前原 宏美¹⁾、久佐賀真理²⁾、福本久美子³⁾、柴尾 嘉洋⁴⁾、前原 潤一⁴⁾

The association of maternal consciousness in adolescent females with their childhood experiences

Hiromi MAEHARA¹⁾, Mari KUSAGA²⁾, Kumiko FUKUMOTO³⁾,
Yoshihiro SHIBAO⁴⁾, Junichi MAEHARA⁴⁾

Abstract

In the present study, we conducted a questionnaire survey in first-year university students to understand the state of maternal consciousness in adolescent females and its relationship to childhood experiences. We included investigative content to determine whether specific childhood experiences could influence maternal consciousness. We particularly considered contact with other young children during childhood as well as experiences of care received from neighboring adults. We investigated maternal consciousness via exploratory factor analysis and affirmative factor analysis to understand the underlying characteristics of maternal consciousness. As a result of the exploratory factor analysis, 3 factors were extracted: an "obligatory aspect" that corresponds to a traditional motherhood role, a "nursing aspect" that is affirmative to child care, and a "negative aspect" that denies a traditional motherhood role. Regarding maternal consciousness, it was determined that underlying factors included both denial and affirmation of a traditional motherhood role. As a result of the affirmative factor analysis, fidelity index values were $\chi^2(116) = 306.824$ ($p < .001$), $GFI = .96$, $AGFI = .92$, $RMSEA = .044$, and $AIC = 380.824$. We performed a covariance structure analysis to examine the association between maternal consciousness and childhood experiences. Regarding the results of the covariance structure analysis, father-related experiences during childhood were associated with the obligatory aspect ($\beta = .23$, $p < .001$) of maternal consciousness, while mother-related experiences showed a significant relationship with the negative aspect ($\beta = -.12$, $p < .001$). The fidelity index values were $\chi^2(2) = 1.26$ ($n.s.$), $GFI = .997$, $AGFI = .986$, $RMSEA = .00$, and $AIC = 17.26$. Maternal consciousness in adolescent females is intricately related to past experiences with parents. Our data suggest that both mother and father play vital roles in future maternal behavior of offspring.

Key Word : adolescent females, maternal consciousness, childhood experiences

1) 帝京大学福岡医療技術学部 〒836-8505 大牟田市岬町6-22 Teikyo University Fukuoka Medical Technology Faculty

代表著者の通信先：帝京大学福岡医療技術学部看護学科 〒836-8505 大牟田市岬町6-22

TEL : 0944-57-8333 FAX : 0944-57-8333 Email : maehara@fmt.teikyo-u.ac.jp

2) 長崎県立大学 〒851-2195 長崎県西彼杵郡長与町まなび野1-1-1 University of Nagasaki

3) 九州看護福祉大学 〒865-0062 熊本県玉名市富尾888 Kyushu University of Nursing and Social welfare

4) 済生会熊本病院 〒861-4101 熊本県熊本市南区近見5-3-1 Saiseikai Kumamoto Hospital

受付日：H29.2.26, 採択日：H29.10.17

1. 緒言

近年、少子化や核家族化の進展¹⁾により、乳幼児との接触体験の減少、子育ての伝承の欠如、地域における子育て支援力の低下、親の育児不安や育児困難感などが急増しており²⁻³⁾、児童虐待の続発が深刻な社会問題となっている。主な虐待者は、実母(48.3%)が最も多く、次いで実父(41.0%)の順となっている⁴⁾。児童虐待の被害は、家庭内で潜在化している傾向にあることが特徴として読み取れる。児童虐待などの不適切な養育態度は、世代間伝達を引き起こす危険性が高く、次世代への影響が危惧される重大な問題である。厚生労働省では、児童虐待の発生を予防するための施策を重大な課題として、子育て支援事業の普及と推進を掲げ、乳児家庭全戸訪問事業⁵⁾、養育支援訪問事業⁶⁾、地域子育て支援拠点事業⁷⁾の実施を推進し、主に子どもを養育する母親を対象とした援助を充実させている。

実母による虐待事件の続発は、母性愛の喪失を社会問題としてクローズアップさせ、母性神話を打ち崩すきっかけとなった⁸⁾。我が国では、母親役割を固定化する伝統的な母性観に基づく役割規範が内面化し、産む性としての母性が定着していた。しかし、時代の変遷に伴い女性が子どもを産み育てるという母親役割は、性差別を正当化する根拠となり、社会文化的制約となり得るという見識が高まってきた。このような背景には、1970年代以後の性別役割分業社会の変革と性差別の撤廃をめざすフェミニズム女性学による出産をめぐる女性の自己決定権の理論化⁸⁾、雇用分野における男女の機会均等および母性保護を目的とする男女雇用機会均等法(1985)の成立⁹⁾、男女平等社会をつくるための基本的な法律である男女共同参画社会基本法(1999)の制定¹⁰⁾、性と生殖に関する健康と権利であるリプロダクティブ・ヘルス/ライツの概念の提唱(1994)¹¹⁾など女性の自己決定権確立のための社会的な動向がある。女性のニーズは多様化し、働きながら妊娠、出産、育児に臨むことが女性の生き方の選択肢のひとつとなってきた。このようにして女性の社会進出は飛躍的に拡大し、1980以降に共働き世帯は年々増加し、1997年以降は勤労者世帯の過半数を超えて経過している¹²⁾。その一方で固定的な性別役割分業意識は依然として残存しており、仕事と家庭生活の両立に問題を抱える女性が増加している。働く母親のストレスは、不適切な育児行動を生み出す要因である可能性が高い。

学校教育では、男女共同参画社会を実現するために固定的な性別役割分担意識を是正し、人権尊重を基盤にした男女平等観の形成を図ることを目指した教育の充実が図られてきた。学校における性教育は、性に関する科学的知識、生命尊重、人間尊重、男女平等に基づく異性観、

適切な意思決定と行動選択による豊かな人間形成を目的としている¹³⁾。しかし、近年では性に関する価値観の多様化、情報の氾濫、性犯罪の増加、核家族化や少子化による家庭の教育力の低下、性的成熟の早まりなどを背景とした性の逸脱行動、望まない妊娠、人工妊娠中絶、性感染症の増加など、性に関する問題が一層深刻化してきている¹³⁾。このような性に関する問題は、若者の母性に関する意識に少なからず影響を及ぼしている可能性が高いと考える。

近年の母性に関わる問題は、世代を超えた影響を憂慮すべき重大な問題である。母性に関わる問題がクローズアップされている昨今、改めて母性の発達を論究することは、健全な母性の育成において重要な指標となり得ると考える。母性をどのように捉え、どのように意識するかといった女性の妊孕性に関わる意識や自覚が母性意識である。母性意識は、女性が子どもの存在に対して感じる肯定的な感情や期待などと定義されることが多く、生後の生育環境、発達段階のなかで母性に関わる個人的・諸経験を重ねることによって形成・変容するといわれている¹⁴⁻¹⁶⁾。子どもとの早期接触や子どもに対する感情(対児感情)は母親になることへの肯定的な意識を育て、母性意識の形成・発達の中核と考えられている¹⁷⁾。青年期にある女子は、次世代を担う存在として妊娠、出産し、母親となる可能性が高く、母親になる準備期にある。それゆえ、青年期女子の母性意識のありようが次世代の母性の健全な育成に関わるものとなり得る可能性が高い。近年では、母性の変遷に加え少子化と核家族化の進展によって家庭内や地域における母親行動を観察する機会や乳幼児とのふれあい体験などが少なくなってきており、次世代を意識したアイデンティティは希薄化する傾向にあると考える。だからこそ、かつては家庭や地域のなかに自然に備わっていた母性意識を育成するための教育的機会を意図的に創り出す支援が重大な課題となってくる。文部科学省および厚生労働省は、母性の育成に向けた施策として主に小中高校生を対象とした乳幼児とのふれあい体験を実施し、全国の市町村で様々な取り組み¹⁸⁾を進めてきた。小中高校生を対象とした子どもとの接触体験については既に多くの知見が積み重ねられ、子どもに対する情意的・感情的領域を高めることなどが報告¹⁹⁻²⁰⁾されている。乳幼児のふれあい体験で培った子どもに対する興味や関心、思いやりや愛着の感情などについては、いかに継続されるのかを検証した上で、母性意識を育成することや児童虐待を予防するための効果を明確にすることが重要であると考えられる。すなわち、乳幼児のふれあい体験ののち、一定の期間を経過した年代にある青年期女子の子どもへの感情を含む母性意識を検証することは、乳幼児とのふ

れあい体験の効果を図る上で意義が大きい。青年期女子は、母性へのレディネスを高める重要な時期にある。しかし、現代社会では女性のライフスタイルが多様化しており、産む性としての母性に対する意識や価値に大きな個人差が生じていることも事実である。個人の主観的な体験に関する見解や社会情勢や生活状況が著しく変化した現代における青年期女子の母性を捉え直すことに意義があると考えられる。

本研究は、現代の青年期女子の母性意識の実態を把握することに加え、青年期女子の母性意識と幼少期の体験との関連を検討することを目的とした。幼少期の体験については、青年期女子の母性意識に影響を及ぼす要因となり得るかを検証するために本研究の調査内容に含めた。幼少期の体験として、肯定的な母性意識の発達に関連する重要な要因^{14,16-17,21)}である幼少期における幼い子どもとの接触体験と幼少期に周囲のおとなから世話を受けた体験を取り上げた。また現代の青年期女子の母性意識を特徴づける指標として、幼少期の体験における下のきょうだいの有無と母親の就業の有無を取り上げ、青年期女子の母性意識に及ぼす影響について比較を行った。本研究の調査で得られた知見は、青年期女子の母性意識の涵養に向けた必要な支援を検討するための基礎的資料となり得ると考える。本研究の対象は、青年期女子の個人の母性意識の特徴や発達過程を知るために特別な研鑽のない時期にある女子大学生1年とした。本研究は、青年期女子の母性意識と幼少期の体験との間に因果関係が存在することを仮定し、仮説モデルを図1のように設定した。

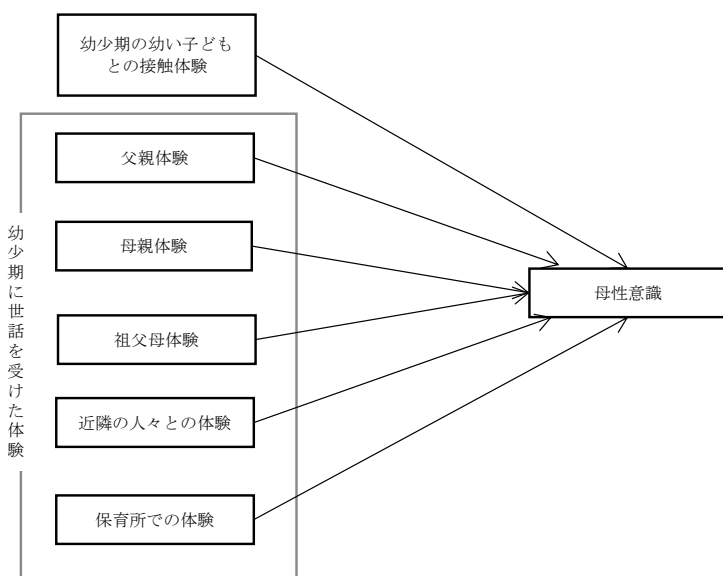


図1. 幼少期の体験が母性意識に及ぼす影響
(本研究における仮説モデル)

2. 研究方法

1) 調査対象者

研究の趣旨に同意したA県内の3大学の1年生女子358名を調査対象とした。調査票は325名から回収し(回収率90.8%)、そのうち欠損値のない有効回答であった233名(有効回答率71.7%)を分析対象とした。

2) 調査期間

2011年12月に調査を実施した。

3) 調査方法

無記名自己記入式質問紙調査を実施した。調査票の配布と回収は大学に依頼し、厳封にて回収した。対象者の研究の同意は、調査票の提出をもって得た。

4) 調査内容

(1) 対象者の属性

年齢、きょうだい構成(きょうだい数、下のきょうだいの有無)、母親の就業の有無について回答を求めた。

(2) 青年期女子の母性意識

本研究では、青年期女子の母性意識を、女性が母親になることの自覚、また自覚に基づく妊娠・分娩、育児に対する価値観であり、発達段階のなかで個人的な諸経験により形成・変容するものと定義した。青年期女子の母性意識を評価する尺度として母性理念判定尺度¹⁶⁾を使用した。母性理念判定尺度は、伝統的な母親役割を肯定する項目(以下、肯定項目と記す)18項目と否定する項目(以下、否定項目と記す)9項目(合計27項目)で構成されている。

非常にそう思う(5点)と非常にちがう(1点)を両端とする5段階で自己評価の回答を求めた。母性理念判定尺度¹⁶⁾の探索的因子分析(最尤法、プロマックス回転)と確認的因子分析を実施し、本研究で使用する尺度を作成した。得点が高いほど母性意識の自己評価が高いことを示す。

(3) 幼少期における幼い子どもとの接触体験

幼少期における幼い子どもとの接触体験を評価する尺度として乳児接触体験質問紙¹⁶⁾を使用した。乳児接触体験質問紙は、乳児との接触体験を尋ねる15項目で構成されている。本来、乳児接触体験質問紙は、そのことを3回以上たびたびしたことがある(2点)、1~2回したことがある(1点)、全くしたことがない(0点)の3段階評価であるが、本研究では、よくあった(4点)、ときどきあった(3点)、あまりなかった(2点)、なかった(1点)の4段階で体験の頻度の回答を求めた。得点が高いほど幼少期における幼い子どもとの接触体験が豊富であること

を示す。

(4) 幼少期に周囲のおとなから世話を受けた体験

幼少期に周囲のおとなから世話を受けた体験を評価する尺度として接触体験(父親・母親・祖父母・近隣の人々との体験と保育所での体験)質問紙²²⁾(以下、接触体験質問紙と記す)を使用した。接触体験質問紙は、父親との体験(以下、父親体験と記す)6項目、母親との体験(以下、母親体験と記す)6項目、祖父母との体験(以下、祖父母体験と記す)5項目、近隣の人々との体験(以下、近隣体験と記す)5項目、保育所での体験(以下、保育所体験と記す)1項目(合計23項目)で構成されている。よくあった(4点)となかった(1点)を両端とする4段階で体験の頻度の回答を求めた。得点が高いほど幼少期に周囲のおとなから世話を受けた体験の頻度が高いことを示す。

5) 分析方法

(1) 対象者の属性の単純集計, 百分率の算出

年齢, きょうだい構成(きょうだい数, 下のきょうだいの有無), 母親の就業の有無の単純集計, 百分率の算出を行った。

(2) 母性理念判定尺度の因子分析

青年期女子の母性意識の特徴を捉えるために, 母性理念判定尺度¹⁶⁾の探索的因子分析(最尤法, プロマックス回転)を実施し, 因子構造を確認した。探索的因子分析は, 天井効果と床効果を除外した上で実施した。各因子を構成する項目は, 因子負荷量.35以上とした。探索的因子分析の因子構造の適合度を確認するために, 確認的因子分析を実施した。確認的因子分析は, 下位尺度からそれぞれ該当する項目が影響を受け, すべての因子間に共分散を仮定して実施した。確認的因子分析の適合度指標は, *GFI*, *AGFI*, *RMSEA*を採用した。

(3) 各尺度の記述統計および信頼性分析

各尺度および下位尺度における加算平均値を尺度得点とし, 各下位尺度の記述統計量(平均値・標準偏差)の算出を行った。各下位尺度の内的整合性を確認するために *Cronbach* の α 係数を求めた。

(4) 各尺度間の相関関係

青年期女子の母性意識, 幼少期の体験の相関関係を確認するために, 各下位尺度間の *Spearman* の順位相関係数を算出した。

(5) 各尺度の下のきょうだいの有無と母親の就業の有無による比較

青年期女子の母性意識と幼少期の体験における下のきょうだいの有無と母親の就業の有無による差異を確認するために, 下のきょうだいの有無と母親の就業の有無を従属変数, 母性理念判定尺度, 乳児接触体質問紙と接

触体験質問紙を独立変数とする *t* 検定を実施した。

(6) 各尺度間の因果関係

青年期女子の母性意識と幼少期の体験の因果関係を検証するために, 本研究の仮説モデルに基づき, 乳児接触体質問紙と接触体験質問紙を独立変数, 母性理念判定尺度を従属変数とする共分散構造分析を実施した。仮説モデルに対応する観測変数は各下位尺度を使用し, 潜在変数でまとめて分析を行った。独立変数の下位尺度間と従属変数の誤差変数には, *Spearman* の順位相関係数に基づき, 共分散を仮定した。分析は5%水準で有意傾向を示さなかったパスを削除しながらモデルを改良し, 最も適合度の良いモデルを採用した。モデルの一般的適合度基準は, *GFI*, *AGFI*は.9以上, *RMSEA*は.05以下とした。

以上, すべての統計学的な有意確率は $p < .05$ とした。統計解析には, SPSS (IBM SPSS Statistics ver23) と Amos (IBM Amos ver23) を使用した。

6) 倫理的配慮

研究対象者が在籍する大学の責任者に口頭および書面にて研究の目的・方法, 研究参加の任意性, 研究協力辞退の保障, 匿名性の確保, データ管理徹底, 学会誌などでの公表などの説明を行い, 書面にて同意を得た。研究対象者には, 書面にて上記内容を説明し, 調査票の提出をもって同意を得た。

なお, 本研究は, 筆者が九州看護福祉大学大学院看護福祉学研究科(修士課程)在学中に九州看護福祉大学倫理審査委員会にて審査を受け, 承認を得たうえで実施した(承認番号23-010)。

3. 研究結果

1) 対象者の属性

対象者の年齢は18~24歳(平均年齢 19.18 ± 1.01)であった。青年期に該当する年齢は学問分野により相違があるため, 厚生労働省(健康日本21)²³⁾に記載されている該当年齢(15~24歳)を参考とし, 対象者として適切であると判断した。きょうだい数は, ひとりっ子が14名(6.0%), 2人きょうだい110名(47.2%), 3人きょうだい91名(39.1%), 4人きょうだい18名(7.7%)であった。下のきょうだいの有無は, きょうだい有が132名(43.3%), きょうだい無が101名(56.7%)であった。母親の就業の有無は, 就業有が192名(82.4%), 就業無が41名(17.6%)であった。

2) 母性理念判定尺度の因子分析

母性理念判定尺度の天井効果(6項目)と床効果(1項目)を除外し, 探索的因子分析(最尤法, プロマックス回

転)を実施した結果を表1に示した。分析の過程で因子負荷量が.35に満たなかった3項目を削除した。第1因子は肯定項目7項目(因子負荷量.85~.38)で構成された。第1因子は、「11. 女は子どもをもつことで、人生の価値を知ることができる」、「10. 子どもを産んで育てるのは、社会に対する女の努めである」など妊娠、出産、育児に対する義務感や価値観を肯定する項目の負荷量が高く「義務的側面」とした。第2項目は肯定項目6項目(因子負荷量.79~.45)で構成された。第2因子は、「19. わが子の成長を見とどけるために、長生きをしなければならない」、「20. 母親がわが子を自分の一部だと感じるのは当然である」などわが子に対する養護性を肯定する項目の負荷量が高く「養護的側面」とした。第3項目は否定項目4項目(因子負荷量.54~.43)で構成された。第3因子は、「21. 育児に追われていると若さが早く失われる」、「12. 結婚生活を楽しむためには、子どもをつくらないほうがよい」など妊娠、出産、育児に対する否定的な意識が高い項目の負荷量が高く「否定的側面」とした。探索的因子分析の結果に基づき実施した確認的因子分析の結果を表2に示した。適合度指標は、 $\chi^2(116) = 306.824 (p < .001)$, $GFI = .96$, $AGFI = .92$, $RMSEA = .044$, $AIC = 380.824$ であった。

3) 各尺度の記述統計および信頼性分析

各尺度の記述統計および信頼性係数を表3に示した。乳児接触体験質問紙と接触体験質問紙および下位尺度は高い信頼性を示した($\alpha = .85 \sim .93$)。母性理念判定尺度および下位尺度はやや低い信頼性を示した(.66~.79)が、 α が.60よりも大きく、内的整合性が確認できたと判断した。

4) 各尺度の下のきょうだいの有無、母親の就業の有無による比較

各尺度の下のきょうだいの有無と母親の就業の有無によるt検定を実施した結果を表4、表5に示した。各尺度の下の

表1. 母性理念判定尺度の探索的因子分析(最尤法, プロマックス回転)(N=233)

項目		I	II	III
義務的側面	11 女は子どもをもつことで、人生の価値を知ることができる	.85	-.08	-.19
	10 子どもを産んで育てるのは、社会に対する女の努めである	.74	-.08	-.05
	13 育児は女に向いている仕事であるから、するのが自然である	.67	-.12	.08
	16 子どもを産んで育てなければ、女に生まれた甲斐がない	.53	-.04	.27
	26 育児に専念したいというのが女の本音である	.40	.30	.06
	7 女は子どもを産むことで、自分が生きた証を残すことができる	.40	.20	-.09
	8 どんなことをしても、赤ちゃんは母乳で育てるべきである	.38	.14	.08
養護的側面	19 わが子の成長を見とどけるために、長生きをしなければならない	-.17	.79	.15
	20 母親がわが子を自分の一部だと感じるのは当然である	.08	.64	.13
	25 わが子の存在を感じるだけで毎日の生活に張りが出る	.09	.63	-.18
	22 わが子のためなら自分を犠牲にすることができる	-.16	.60	-.06
	23 子どもを育てるのは生みの母親が最良である	.16	.53	-.03
	5 赤ちゃんを無事に産むためならどんな苦しみもがまんできる	.08	.45	-.23
	21 育児に追われていると若さが早く失われる	-.02	.08	.54
否定的側面	12 結婚生活を楽しむためには、子どもをつくらないほうがよい	.02	-.18	.50
	24 育児から開放されるときに人間らしい自由な生活ができる	.25	.13	.48
	6 女だけが妊娠やお産の苦勞をするのは不公平である	-.07	-.06	.43
		I	—	
	II	.51	—	
	III	.16	-.14	—

分析から除外した項目

天井効果	1 妊娠は女にとってすばらしい出来事である
	2 赤ちゃんを産むことができるのは女の特権である
	9 予定していない妊娠の場合は、人工中絶もやむを得ない
	14 子どもを産んで育てることは、自分自身の成長につながる
	17 子どもがいることで、家庭生活はより楽しくなる
	18 育児は妻だけではなく、夫も分担すべき仕事である
床効果	3 妊娠した自分の姿は想像するだけでみじめである
因子負荷量.35以下	4 赤ちゃんを産んではじめて子どものかわいさがわかる
	15 わが子のために他人にあずけても、自分の仕事を続けるべきである
	27 母親が子どもの成長を生き甲斐にするのは間違っている

表2. 母性理念判定尺度の確認的因子分析(N=233)

項目		I	II	III	
義務的側面	11 女は子どもをもつことで、人生の価値を知ることができる	.75			
	10 子どもを産んで育てるのは、社会に対する女の努めである	.67			
	13 育児は女に向いている仕事であるから、するのが自然である	.60			
	16 子どもを産んで育てなければ、女に生まれた甲斐がない	.54			
	26 育児に専念したいというのが女の本音である	.57			
	7 女は子どもを産むことで、自分が生きた証を残すことができる	.40			
	8 どんなことをしても、赤ちゃんは母乳で育てるべきである	.50			
養護的側面	19 わが子の成長を見とどけるために、長生きをしなければならない		.64		
	20 母親がわが子を自分の一部だと感じるのは当然である		.66		
	25 わが子の存在を感じるだけで毎日の生活に張りが出る		.73		
	22 わが子のためなら自分を犠牲にすることができる		.50		
	23 子どもを育てるのは生みの母親が最良である		.64		
	5 赤ちゃんを無事に産むためならどんな苦しみもがまんできる		.52		
	21 育児に追われていると若さが早く失われる			.55	
否定的側面	12 結婚生活を楽しむためには、子どもをつくらないほうがよい			.52	
	24 育児から開放されるときに人間らしい自由な生活ができる			.47	
	6 女だけが妊娠やお産の苦勞をするのは不公平である			.45	
		因子間相関	I	—	
		II	.57	—	
		III	.21	-.15	—

数値は標準化推定値である。

$\chi^2(116) = 306.824 (p < .001)$ $GFI = .96$, $AGFI = .92$, $RMSEA = .044$, $AIC = 380.824$

表3. 各尺度の記述統計及び信頼性係数(N=233)

	平均値	標準偏差	α
乳児接触体験質問紙	2.27	.69	.93
接触体験質問紙	2.98	.53	.91
父親体験	2.62	.63	.85
母親体験	3.07	.56	.91
祖父体験	2.85	.63	.87
近隣体験	2.23	.69	.87
保育所体験	3.04	1.22	—
母性理念判定尺度	3.09	.45	.78
養護的側面	2.90	.48	.79
義務的側面	3.05	.70	.78
否定的側面	2.15	.51	.66

きょうだいの有無による体験に有意差を確認した項目は、「乳幼児接触体験質問紙」($t=-3.074$, $df=231$, $p<.01$, 有: $2.39 \pm .67$, 無: $2.11 \pm .68$), 「1. 体にさわったこと」($t=-2.27$, $df=231$, $p<.05$, 有: $3.31 \pm .87$, 無: $3.06 \pm .80$), 「2. 抱っこしたこと」($t=-2.278$, $df=231$, $p<.05$, 有: $3.33 \pm .88$, 無: $3.06 \pm .89$), 「4. お風呂にいったこと」($t=-2.37$, $df=228.583$, $p<.05$, 有: 2.00 ± 1.17 , 無: $1.66 \pm .99$), 「7. おもちゃで遊んだこと」($t=-2.272$, $df=231$, $p<.05$, 有: $3.30 \pm .88$, 無: $3.04 \pm .87$), 「8. 添い寝したこと」($t=-2.73$, $df=231$, $p<.01$, 有: 2.46 ± 1.18 , 無: 2.04 ± 1.16), 「10. おむつ

を換えたこと」($t=-2.913$, $df=226.447$, $p<.01$, 有: 1.99 ± 1.16 , 無: 1.57 ± 1.02), 「11. あやしたこと」($t=-2.16$, $df=231$, $p<.05$, 有: 2.89 ± 1.05 , 無: 2.59 ± 1.05), 「12. ミルクを飲ませたこと」($t=-2.936$, $df=227.638$, $p<.01$, 有: 2.15 ± 1.20 , 無: 1.72 ± 1.03), 「13. ミルクをつくったこと」($t=-2.256$, $df=228.108$, $p<.05$, 有: 1.86 ± 1.09 , 無: $1.56 \pm .93$), 「14. 手を握ったこと」($t=-2.621$, $df=231$, $p<.01$, 有: $3.42 \pm .865$, 無: $3.12 \pm .852$), 「15. いらないバーをしたこと」($t=-3.195$, $df=205.027$, $p<.01$, 有: 2.83 ± 1.05 , 無: 2.37 ± 1.15), 母性理念判定尺度の「養護的側面」($t=-2.198$, $df=231$,

表4. 各尺度の下のきょうだいの有無による比較(t検定)

項目	有 (N=132)		無 (N=101)		t値
	M	SD	M	SD	
母性理念判定尺度	3.39	.42	3.23	.46	2.71**
養護的側面	2.34	.49	2.24	.55	1.58
11 女の子をもつことで、人生の価値を知ることができる	3.29	.99	2.96	1.13	2.35*
10 子どもを産んで育てるのは、社会に対する女の努めである	3.08	1.02	3.04	.94	.34
13 育児は女に向いている仕事であるから、するのが自然である	2.79	.93	2.76	1.03	.20
16 子どもを産んで育てなければ、女に生まれた甲斐がない	2.33	1.00	2.31	1.08	.14
26 育児に専念したいというのが女の本音である	3.26	.95	3.17	.86	.74
7 女の子を産むことで、自分が生きた証拠を残すことができる	3.47	1.07	3.25	1.03	1.60
8 どんなことをしても、赤ちゃんは母乳で育てるべきである	3.14	.93	2.87	.83	2.33*
養護的側面	4.13	.63	3.95	.68	2.07*
19 わが子の成長を見とどけるために、長生きをしなければならない	4.14	.91	3.96	.88	1.55
20 母親がわが子を自分の一部だと感じるのは当然である	3.95	.92	3.95	.84	-.03
25 わが子の存在を感じるだけで毎日の生活に張りが出る	4.00	.88	3.75	.89	2.12*
22 わが子のためなら自分を犠牲にすることができる	4.05	.83	3.81	.89	2.13*
23 子どもを育てるのは生みの母親が最良である	3.90	.93	3.66	.98	1.89
5 赤ちゃんを無事に産むためならどんな苦しみもがまんできる	3.94	.95	3.62	1.12	2.28*
否定的側面	2.76	.50	2.68	.51	1.19
21 育児に追われていると若さが早く失われる	3.11	.94	2.94	.84	1.39
12 結婚生活を楽にするためには、子どもをつくらぬほうがよい	3.86	.90	3.72	.95	1.16
24 育児から開放されるときに人間らしい自由な生活ができる	3.26	.88	3.24	.87	.17
6 女だけが妊娠やお産の苦勞をするのは不公平である	3.25	1.14	3.28	1.14	-.18
乳幼児接触体験	2.39	.67	2.11	.68	3.07**
1 体にさわったこと	3.31	.87	3.06	.80	2.27**
2 抱っこしたこと	3.33	.88	3.06	.89	2.28**
3 着物を着せ替えたこと	2.42	1.13	2.17	1.08	1.75
4 お風呂にいれたこと	2.00	1.17	1.66	.99	2.37**
5 おんぶしたこと	2.85	1.03	2.65	.99	1.45
6 ほほずりやキスをしたこと	2.14	1.11	1.89	1.05	1.71
7 おもちゃで遊んだこと	3.30	.88	3.04	.87	2.27*
8 添い寝したこと	2.46	1.18	2.04	1.16	2.73**
9 おむつを洗濯したこと	1.51	.90	1.41	.87	.86
10 おむつを換えたこと	1.99	1.16	1.57	1.02	2.91**
11 あやしたこと	2.89	1.05	2.59	1.05	2.16*
12 ミルクを飲ませたこと	2.15	1.20	1.72	1.03	2.94**
13 ミルクをつくったこと	1.86	1.09	1.56	.93	2.26*
14 手を握ったこと	3.42	.87	3.12	.85	2.62**
15 いらないバーをしたこと	2.83	1.05	2.37	1.15	3.20**
接触体験質問紙	2.98	.53	2.97	.52	.13
父親体験	2.61	.64	2.63	.61	-.26
1 父親に抱っこされたことがある	3.45	.82	3.44	.82	.17
2 父親におんぶされたことがある	3.37	.91	3.40	.87	-.21
3 父親と一緒に料理をつくったことがある	2.33	1.13	2.42	1.17	-.54
4 父親と遊んだことがある	3.36	.88	3.33	.85	.32
5 父親と掃除をしたことがある	2.68	1.04	2.73	1.05	-.37
6 父親と映画をみたり本を読んだりしたことがある	2.74	1.08	2.91	1.03	-1.20
母親体験	3.09	.55	3.04	.56	.71
7 母親に抱っこされたことがある	3.79	.64	3.72	.62	.78
8 母親におんぶされたことがある	3.66	.74	3.63	.72	.26
9 母親と一緒に料理をつくったことがある	3.48	.82	3.43	.85	.47
10 母親と一緒に遊んだことがある	3.61	.77	3.48	.80	1.34
11 母親と一緒に掃除をしたことがある	3.45	.85	3.42	.83	.28
12 母親と映画をみたり本を読んだりしたことがある	3.26	.91	3.24	.86	.17
祖父母体験	2.86	.63	2.84	.63	0.3
13 祖父母にほめてもらったことがある	3.48	.82	3.49	.78	-.00
14 祖父母に世話をしてもらった経験がある	3.46	.88	3.50	.83	-.29
15 祖父母に遊んでももらった経験がある	3.49	.87	3.46	.82	.33
16 祖父母に困ったときに助けてもらった経験がある	3.33	.89	3.19	.98	1.12
17 祖父母に叱られた経験がある	2.72	.99	2.80	1.00	-.63
近隣体験	2.24	.69	2.22	.70	0.27
18 近所のおじさん・おばさんに褒めてもらったことがある	3.11	.91	2.94	.92	1.37
19 近所のおじさん・おばさんに世話をしてもらった経験がある	2.58	1.03	2.69	.99	-.82
20 近所のおじさん・おばさんに遊んでももらった経験がある	2.55	1.02	2.54	.98	.01
21 近所のおじさん・おばさんに困った時に助けてもらった経験がある	2.56	.98	2.49	.99	.58
22 近所のおじさん・おばさんに叱られた経験がある	2.01	.97	2.06	.98	-.40
保育所体験					
23 保育所で世話をしてもらった経験がある	3.05	1.24	3.04	1.20	.04

* $p<.05$ ** $p<.01$

$p < .05$, 有: $3.45 \pm .53$, 無: $3.23 \pm .58$), 「5. 赤ちゃんを無事に産むためならどんな苦しみもがまんできる」($t = -2.275$, $df = 194.708$, $p < .05$, 有: $3.94 \pm .95$, 無: 3.62 ± 1.12), 「8. どんなことをしても, 赤ちゃんは母乳で育てるべきである」($t = -2.326$, $df = 231$, $p < .05$, 有: $3.14 \pm .93$, 無: $2.87 \pm .83$), 「11. 女は子どもをもつことで, 人生の価値を知ることができる」($t = -2.349$, $df = 231$, $p < .05$, 有: $3.29 \pm .99$, 無: 2.96 ± 1.13), 「22. わが子のためなら自分を犠牲にすることができる」($t = -2.126$, $df = 231$, $p < .05$, 有: $4.05 \pm .83$, 無: $3.81 \pm .89$), 「25. わが子の存在を感じるだけで毎日の生活に張りが出る」

($t = -2.116$, $df = 231$, $p < .05$, 有: $4.00 \pm .88$, 無: $3.75 \pm .89$)であった。

各尺度の母親の就業の有無による体験に有意差を確認した項目は, 接触体験質問紙の「3. 父親と一緒に料理をつくったことがある」($t = -2.382$, $df = 66,124$, $p < .05$, 有: 2.44 ± 1.17 , 無: $2.02 \pm .99$), 「23. 保育所で世話をしてもらった経験がある」($t = -2.658$, $df = 52,706$, $p < .05$, 有: 3.15 ± 1.16 , 無: 2.54 ± 1.38)であり, いずれも母親の就業有の方が平均値は高かった。

表5. 各尺度の母親の就業の有無による比較 (t検定)

項目	有 (N=192)		無 (N=41)		t値
	M	SD	M	SD	
母性理念判定尺度	3.31	.43	3.39	.47	-1.15
義務的側面	2.28	.51	2.37	.56	-.92
11 女は子どもをもつことで, 人生の価値を知ることができる	3.13	1.07	3.22	1.06	-.49
10 子どもを産んで育てるのは, 社会に対する女の努めである	3.03	.99	3.22	.96	-1.11
13 育児は女に向いている仕事であるから, するのが自然である	2.77	.98	2.83	.95	-.38
16 子どもを産んで育てなければ, 女に生まれた甲斐がない	2.30	1.02	2.39	1.12	-.49
26 育児に専念したいというのが女の本音である	3.17	.88	3.44	1.03	-1.55
7 女は子どもを産むことで, 自分が生きた証拠を残すことができる	3.39	1.05	3.32	1.11	.38
8 どんなことをしても, 赤ちゃんは母乳で育てるべきである	2.99	.89	3.20	.90	-1.34
養護的側面	4.03	.67	0.66	.11	-1.00
19 わが子の成長を見とどけるために, 長生きをしなければならない	4.05	.91	4.15	.88	-.64
20 母親がわが子を自分の一部だと感じるのは当然である	3.96	.87	3.90	.94	.37
25 わが子の存在を感じるだけで毎日の生活に張りが出る	3.86	.91	4.02	.79	-1.04
22 わが子のためなら自分を犠牲にすることができる	3.94	.88	4.00	.78	-.42
23 子どもを育てるのは生みの母親が最良である	3.80	.96	3.80	.95	-.05
5 赤ちゃんを無事に産むためならどんな苦しみもがまんできる	3.80	1.07	3.80	.84	-.02
否定的側面	2.73	.52	2.72	.44	.02
21 育児に追われていると若さが早く失われる	3.04	.93	3.02	.76	.08
12 結婚生活を楽しむためには, 子どもをつくらないほうがよい	3.77	.94	3.95	.84	-1.14
24 育児から開放されるときに人間らしい自由な生活ができる	3.27	.89	3.17	.83	.63
6 女だけが妊娠やお産の苦勞をするのは不公平である	3.32	1.12	3.00	1.20	1.63
乳幼児接触体験	2.26	.69	2.29	.70	-.25
1 体にさわったこと	3.19	.87	3.24	.73	-.35
2 抱っこしたこと	3.18	.91	3.34	.83	-1.04
3 着物を着せ替えたこと	2.34	1.11	2.20	1.15	.75
4 お風呂にいられたこと	1.83	1.10	1.95	1.14	-.62
5 おんぶしたこと	2.76	1.02	2.80	1.03	-.28
6 ほほずりやキスをしたこと	2.01	1.08	2.12	1.14	-.60
7 おもちゃで遊んだこと	3.15	.90	3.37	.80	-1.41
8 添い寝したこと	2.28	1.18	2.29	1.23	-.08
9 おむつを洗濯したこと	1.50	.92	1.29	.75	1.54
10 おむつを換えたこと	1.80	1.11	1.88	1.19	-.42
11 あやしたこと	2.75	1.04	2.83	1.14	-.43
12 ミルクを飲ませたこと	1.99	1.14	1.85	1.15	.69
13 ミルクをつかったこと	1.73	1.03	1.73	1.05	.02
14 手を握ったこと	3.28	.87	3.32	.88	-.24
15 いないいないばーをしたこと	2.59	1.13	2.80	1.03	-1.10
接触体験質問紙	2.98	.54	2.97	.44	.07
父親体験	0.23	.06	0.24	.05	.07
1 父親に抱っこされたことがある	3.42	.83	3.59	.74	-1.20
2 父親におんぶされたことがある	3.35	.91	3.51	.81	-1.03
3 父親と一緒に料理をつくったことがある	2.44	1.17	2.02	.99	2.38*
4 父親と遊んだことがある	3.33	.85	3.44	.92	-.75
5 父親と掃除をしたことがある	2.72	1.06	2.63	.97	.47
6 父親と映画をみたり本を読んだりしたことがある	2.80	1.09	2.90	.94	-.63
母親体験	3.07	.23	1.22	.20	.20
7 母親に抱っこされたことがある	3.74	.65	3.85	.53	-1.05
8 母親におんぶされたことがある	3.64	.73	3.68	.72	-.34
9 母親と一緒に料理をつくったことがある	3.47	.84	3.39	.80	.55
10 母親と一緒に遊んだことがある	3.56	.78	3.54	.78	.15
11 母親と一緒に掃除をしたことがある	3.46	.85	3.29	.78	1.19
12 母親と映画をみたり本を読んだりしたことがある	3.25	.90	3.24	.83	.04
祖父母体験	2.84	.65	2.92	.52	-.83
13 祖父母にほめてもらったことがある	3.46	.82	3.59	.74	-.88
14 祖父母に世話をしてもらった経験がある	3.46	.87	3.56	.81	-.70
15 祖父母に遊んでもらった経験がある	3.44	.88	3.66	.66	-1.84
16 祖父母に困ったときに助けてもらった経験がある	3.27	.95	3.27	.81	-.02
17 祖父母に叱られた経験がある	2.81	1.00	2.51	.93	1.73
近隣体験	2.23	.69	2.21	.68	.16
18 近所のおじさん・おばさんに褒めてもらったことがある	3.03	.91	3.05	.95	-.11
19 近所のおじさん・おばさんに世話してもらった経験がある	2.64	1.01	2.61	1.00	.15
20 近所のおじさん・おばさんに遊んでもらった経験がある	2.54	1.02	2.56	.90	-.11
21 近所のおじさん・おばさんに困った時に助けてもらった経験がある	2.54	.97	2.46	1.03	.46
22 近所のおじさん・おばさんに叱られた経験がある	2.05	.98	1.93	.93	.75
保育所体験					
23 保育所で世話をしてもらった経験がある	3.15	1.16	2.54	1.38	2.66*

* $p < .05$

5) 各尺度間の相関関係

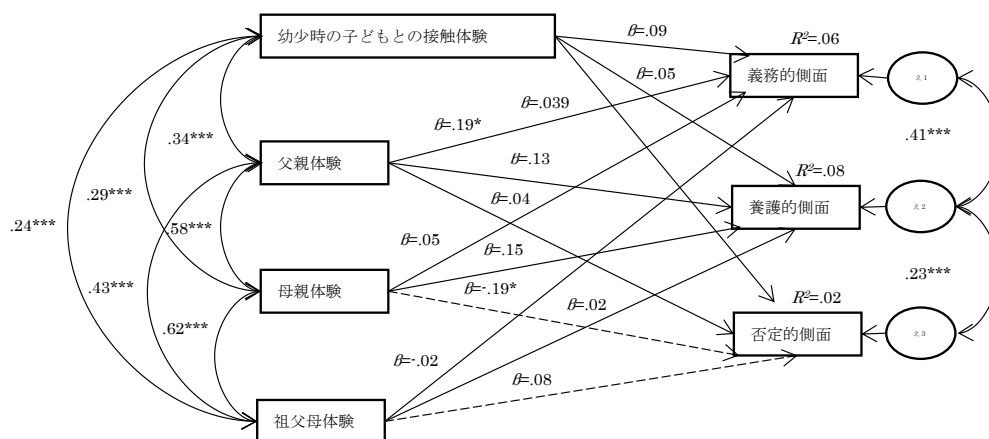
各下位尺度間の Spearman の順位相関係数を表6に示した。各下位尺度間の相関係数が $r = .20$ 以上であり、5%水準で有意な相関関係を示したものを採用した。「義務的側面」と「父親体験」($r = .43, p < .01$)、「養護的側面」と「父

親体験」($r = .64, p < .01$)、「母親体験」($r = .32, p < .01$)、「祖父母体験」($r = .20, p < .01$)、乳児接触体験と「父親体験」($r = .35, p < .01$)、「母親体験」($r = .31, p < .01$)、「祖父母体験」($r = .26, p < .01$)、「近隣体験」($r = .26, p < .01$)に有意な相関を確認した。

表6. 各尺度間の Spearman の順位相関係数

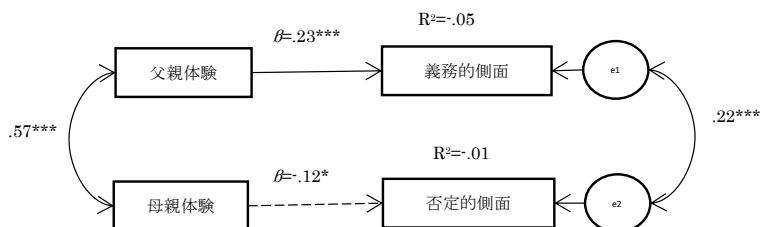
	1	2	3	4	5	6	7	8	9
1 義務的側面	—								
2 養護的側面	.43**	—							
3 否定的側面	.16*	-.10	—						
4 乳児接触体験	.15*	.18**	-.02	—					
5 父親体験	.23**	.29**	-.10	.35**	—				
6 母親体験	.19**	.32**	-.13*	.31**	.61**	—			
7 祖父母体験	.14*	.20**	.02	.26**	.39**	.53**	—		
8 近隣体験	.07	.07	.00	.26**	.34**	.37**	.57**	—	
9 保育所体験	.02	.07	-.02	.16*	.16*	.20**	.19**	.07	—

* $p < .05$, ** $p < .01$



$\chi^2(1) = .251 (n.s.)$
 $GFI = 1.000, AGFI = .991, RMSEA = .00, AIC = 54.251$
 * $p < .05$, *** $p < .001$.
 実線は正の影響、点線は負の影響を示す。

図2. 幼少期の体験が母性意識に及ぼす影響



$\chi^2(2) = 1.26 (n.s.)$
 $GFI = 0.997, AGFI = .986, RMSEA = .00, AIC = 17.26$
 * $p < .05$, *** $p < .001$.
 実線は正の影響、点線は負の影響を示す。

図3. 幼少期の体験が母性意識に及ぼす影響
(本研究における最終モデル)

6) 各尺度間の因果関係

本研究の仮説モデルに基づき共分散構造分析を行った。まず、下位尺度ごとに潜在変数でまとめ実施した分析過程では、 χ^2 値が5%水準で有意であり、モデルの採択の評価には至らなかった。次に、潜在変数でまとめず、観測変数に下位尺度得点を使用して分析を試みた結果、父親体験は義務的側面 ($\beta = .23, p < .001$)、母親体験は否定的側面 ($\beta = -.12, p < .001$) に有意なパスを示した。この結果を図2に示した。この時点での適合度指標は、 $\chi^2(1) = .251 (n.s.)$, $GFI = 1.000$, $AGFI = .991$, $RMSEA = .00$, $AIC = 54.251$ であった。次に、5%水準で有意傾向を示さなかったパスを削除した結果、適合度指標は、 $\chi^2(11) = 20.411 (p < .05)$, $GFI = .976$, $AGFI = .940$, $RMSEA = .061$, $AIC = 54.411$ であった。さらに、5%水準で有意傾向を示さなかった観測変数を削除した結果、適合度指標は、 $\chi^2(2) = 1.26 (n.s.)$, $GFI = .997$, $AGFI = .986$, $RMSEA = .00$, $AIC = 17.26$ であった。以上より、父親体験から義務的側面、母親体験から否定的側面へのパスを設定したモデルが最も適合度指標が良いと判断し、本研究の最終モデルとした。この結果を図3に示した。重決定係数は「義務的側面」($R^2 = .05$)、「否定的側面」($R^2 = .01$)であった。モデルにおける直接効果は、「父親体験」から「義務的側面」($\beta = .23, p < .001$)、「母親体験」から「否定的側面」($\beta = -.12, p < .001$)であった。

4. 考察

1) 青年期女子の母性意識

本研究の対象である大学1年生女子の母性意識は、妊娠、出産、育児を普遍的、必然的になすべきという肯定的な母親役割を受け入れる意識が高い「義務的側面」、子どもの成長を保護し促進する意識が高い「養護的側面」、妊娠、出産、育児に対する否定的な意識が高い「否定的側面」という3つの側面が潜在することが示された。本研究における大学1年生女子の母性意識は、①母親役割を肯定する側面と否定する側面があること、②母親役割を肯定する側面は、産み育てるという母親役割を肯定する意識と育児を肯定する意識の2つの側面を有することを特徴とすることが示された。本研究で使用した母性理念判定尺度は、伝統的な母親役割を肯定する肯定項目と否定する否定項目を含む1因子構造¹⁶⁾を仮定して作成された尺度である。松下ら²⁴⁻²⁵⁾は、大学生を対象に母性理念判定尺度の因子分析を実施し、伝統的な母性を肯定する因子と育児を肯定する因子の2因子構造を抽出した。本研究の結果は、松下ら²⁴⁻²⁵⁾の2因子に加え母性の役割を否定する因子が独立して抽出されたことを特徴としており、大学1年生女子にある青年期女子の母性意識は、発

達の過程で否定的な側面を含みつつあることを示唆した結果であると考えられる。母性意識の否定的な側面は、女性の社会進出の進展や女性の生き方に対する自己決定権の確立などに加え、母親の育児不安や育児の孤立の問題を背景としている可能性も否めない。しかし、否定的な側面に特化した意識を有する一方で、依然として妊娠、出産、育児を積極的に受け入れる伝統的な母性意識は顕在していることも事実である。約20年前に青年期女子の母性意識を検証するために母性理念判定尺度を使用した調査では、青年期女子の伝統的な母親役割肯定率は減少傾向²⁶⁾にあったことを明らかにした上で、母性についてレディネスの視点で見直す必要性を指摘している。具体的には、1981年と1994年に母性理念判定尺度を使用して大学生と高校生の母性意識を調査したもので、大学生の母性意識において、肯定項目3項目(「4. 赤ちゃんを産んでから初めて子どものかわいさがわかる」、「8. どんなことをしても赤ちゃんは母乳で育てるべきである」、「16. 子どもを産んで育てなければ女性に生まれた甲斐がない」と否定項目1項目(「9. 予定していない妊娠の場合は、人工中絶もやむを得ない」)に有意差を確認したことを報告している。本研究の対象である大学1年生女子の母性意識については、「1. 妊娠は女にとってすばらしい出来事である」、「2. 赤ちゃんを産むことができるのは女の特権である」、「9. 予定していない妊娠の場合は、人工中絶もやむを得ない」、「14. 子どもを産んで育てることは、自分自身の成長につながる」、「17. 子どもがいることで、家庭生活はより楽しくなる」、「18. 育児は妻だけではなく、夫も分担すべき仕事である」の6項目に天井効果、「3. 妊娠した自分の姿は想像するだけでみじめである」に床効果を確認した。1994年の調査結果と比較すると、本研究の大学1年生女子は、伝統的な母親役割を肯定する意識を高く保持しながら、人工妊娠中絶を肯定する傾向や育児の固定的な性別役割分業意識を否定する意識などを持ち備えていることを特徴としていることが示された。当然、現代の母親の就業の状況も反映した結果と考えられる。大学1年生女子の母性意識は、幼少期からの現在までの母親との体験が影響している可能性が高い。自分自身がまだ養護されている子どもであるという意識が高く、自分自身が母親になるという母性に関して確固とした意識を具えているとは言い難い。一般的には、現代の女性は、高学歴に伴う女性のキャリア志向の向上が顕著であり、社会的自立の遅延による未婚化や晩婚化が進展している。したがって、大学1年生女子は、母親になることへの自覚を持ち備えるには未熟な時期にあり、混沌とした状況にある可能性も高い。青年期のライフコースの多様化、複雑化に伴い、大学1年生にある青年期女子は、母親の

世代と比較すると、より一層、一個人として生きる自由を選択できる反面、妊娠、出産、育児に対する具体的な見解を明確にできない時期にあり、まさに母性意識を生成している過程の只中にある可能性が高い。つまり、大学1年生という年代は、心理社会的な自立の遅延に伴う母性意識の確立の猶予期間と捉えることができる。したがって、青年期女子の母性意識の発達を評価するには、経年的な調査が必要となる。大学1年生の母性意識の実態を検証することだけでは、明確な見解を得ることに至らず、さらなる継続的な調査が今後の課題となる。

2) 青年期女子の母性意識、幼少期の体験における下のきょうだいの有無による比較

昨今の少子化、核家族化の進展によって家庭の構造が変化しており、きょうだいという人間関係を経験できない子どもの増加を促進していると考えられる。下のきょうだいとの関わりは、母親を含めた子ども同士の関わるの機会や母親のきょうだいへの接し方などの母親行動を観察する機会となり得る。きょうだい関係は親子関係のような縦のつながりと友人のような横のつながりを併せた斜めの関係である。下のきょうだいを世話する体験については、模倣による認知機能や保護や世話などの体験による向社会的行動を含む自己制御の学習につながる²⁷⁾と言われていいる。さらに、下のきょうだいを世話する体験は、幼い子どもに対する愛情や関心、養護性などを育て、母性意識の発達に関わる好意的な感情を向上²⁸⁾させ、育児に対する責任を認識する機会となり得る。本研究では、下のきょうだいの存在によって、「1. 体にさわったこと」、「4. お風呂に入れたこと」、「7. おもちゃで遊んだこと」、「8. 添い寝をしたこと」、「10. おむつを換えたこと」、「11. あやしたこと」、「12. ミルクを飲ませたこと」、「13. ミルクをつくったこと」、「14. 手を握ったこと」、「15. いらないばーをしたこと」など、幼い子どもと遊んだり、触れたりする体験やおむつ交換や哺乳など養育に関する体験が高くなることを示した。大学生を対象に乳児接触体験質問紙を使用した調査²⁹⁾では、「触る」、「手を握る」、「抱っこ」など遊びや乳児の欲求に対応した関わりでの体験は高いが、「おむつの洗濯」、「ミルクをつくる」、「お風呂に入れる」などの乳児の生活に合わせた養育体験は低い結果を示している。本研究における下のきょうだいの有無による体験の比較は、斜めの関係であるきょうだいの存在が、幼い子どもの欲求や遊びに対応した関わりでの体験に加え、幼い子どもの生活に合わせた養育体験を豊富にすることを示した。昨今の育児不安や児童虐待が増加した背景には、親になる以前の幼い子どもに対する世話体験の不足がひとつの要因と考えられている。将来の育児に対する

責任意識を形成するためには、子どもを養育する行動パターンや内面化を促進するための機会を意図的に与えることが必要となる。特に、日常において幼い子どもとの体験が少ないひとりっ子や下にきょうだいがいない末っ子にとって貴重な機会となり得ると考える。

母性意識については、下のきょうだいの存在によって「11. 赤ちゃんを無事に産むためならどんな苦しみもがまんできる」、「8. どんなことをしても赤ちゃんは母乳で育てるべきである」、「25. わが子の存在を感じるだけで毎日の生活に張りが出る」、「22. わが子のためなら自分を犠牲にすることができる」、「5. 赤ちゃんを無事に産むためならどんな苦しみもがまんできる」などの項目が高くなり、母親として赤ちゃんの存在を尊重し、妊娠、出産、育児に対する責任感や価値観など肯定的な意識が高くなる傾向が示された。これは、実際に母親と下のきょうだいの関わりに触れることで母親行動を可視化でき、母親としてのイメージが育まれることの効果ではないかと考える。きょうだい数の減少により日常的なきょうだい同士の関わりが難しい家庭が増加している現代において、異年齢の子ども同士の関わるの機会を設けることが、育児の具体的なイメージを得ることに繋がると考える。

3) 青年期女子の母性意識、幼少期の体験における母親の就業の有無による比較

近年、男女平等の理念の浸透や女性の社会進出に伴い、固定的な性別役割分業は減少傾向にある。「男女共同参画社会に関する世論調査」(内閣府2017)³⁰⁾において「夫は仕事、妻は家庭」という性別役割分業について反対意見(54.3%)が増加傾向にあることが示されている。我が国の共働き世帯数は、本研究の対象者が出生した約20年前頃から増加し、1997年以降は片働き世帯を上回って推移しているため、本研究の対象者のほとんどは、共働きは一般的であるという認識のなかで育ってきた可能性が高い。共働き世帯のうち子どもを持つ世帯については、両親の育児と家事の協働が必至となる可能性が高い。本研究では、母親が就業をしている場合において、「3. 父親と一緒に料理をつくったことがある」という体験に有意差を確認し、母親の就業によって父親の育児や家事の参加度が高くなることを示した。現代では、父親の育児参加が反映して、母性、父性に代わり親性の重要性が定着しつつある。人間の生命の生産と養育は、男女両性の成体における養育欲求、養育行動であり、従来の固定的な性別役割分業や親役割にとらわれることなく、ひとりひとりの育児能力の個別性を見出していくことが夫婦関係を築くうえで重要視されている。父親の育児や家事の参加が、母親の育児に対する肯定感を向上させ、生活基盤となる

家庭を安定させることへの期待が大きい³¹⁾。

また、母親が就業している場合は、保育所体験が高くなることが示された。保育所は、保護者が労働や疾病などの理由により保護者の委託を受けて保育を行う施設である。母親が就業している場合は、子どもを保育所に入所させている事例が多く、必然的に保育所での体験は高くなると考える。今後、さらに共働き世帯が増加する可能性は高く、保育所の需要は益々増加すると推察できる。日中のほとんどの時間を保育所で過ごす乳幼児に対して、母性の役割を保育士などの職員が担う機会が多く、両親と保育士などの職員の連携が重要となる。また、保育所では、異年齢の乳幼児が斜めのつながりを体験できる遊びを企画することや、おむつの交換や哺乳など幼少の子どもに対してお世話をする養育体験の機会を設けることで、将来的に母性意識を育成する効果を引き出す可能性が期待できると考える。

4) 青年期女子の母性意識と幼少期の体験の関連

近年の核家族化や少子化の進展、女性の社会進出などの様々な要因が重なり、母親の育児と就業の両立の困難さ、孤独な育児の悩みや不安は重大な社会問題としてクローズアップされている。従来の「男は仕事、女は家庭」という構図や母性原理に象徴される母性神話は価値を失い、様々な家族や親子関係が存在する現代では、父親の育児と家事に関与する態度が重要度を増している。本研究では、大学1年生女子の幼少期における「父親体験」が母性意識の「義務的側面」を高める要因となることが示された。父親との体験は、妊娠、出産、育児に対する肯定的な側面が高く、特に育児に対して義務感や価値観を高める可能性を明示した。父親の育児参加は、母親の育児不安の軽減³²⁻³⁴⁾や母親の子どもに対する好意的な関わり³³⁾に繋がると言われている。さらに、父親自身の子どもへの愛情を育み、育児に対する好意的な態度や感情を促進し³¹⁾、父親自身が成長発達する機会となり得る可能性が高く重要な経験³⁴⁾と捉えられている。しかし一方では、依然として母性を母親と捉える思想は高い傾向を示している。母親は、主たる養育者として育児の重要な役割を担い、育児に対する感情や態度は母性意識の中核を成してきた。子どもを思いやる心、子どもの心を汲み取る能力、子どもへの愛情は母性意識の本質であり、子どもの健全な成長には欠かせない感情である。子どもの育ちには、可愛い、愛しい、守りたいと感じる本能的な愛情の交流が大切であり、そこに母性と母親を切り離せない理由があるのではないかと考える。また、本研究では、大学1年生女子の幼少期における「母親体験」が母性意識の「否定的側面」を低減する要因となることが示された。幼

少期における母親との体験は、育児に対する不公平感や疲弊感など否定的な側面を低減し、育児に対して肯定的な側面を育成する可能性が示唆された。幼少期に母親から優しく世話を受けたと認識していることが、子どもに対して肯定的なイメージを培うという先行研究¹⁴⁾を支持する結果であり、改めて母親との体験の重要性を示した結果である。いわば、母性に対する概念の変遷に依拠することなく、今なお、幼少期の母親との体験は必要不可欠であることを示した結果と考える。以上より、母性意識の育成においては、幼少期の父親と母親の体験が鍵となり、育児を母親に加担するのではなく、父親と協働することの重要性が示された。

子育てにおける伝統的な父母の役割を、それぞれ父性、母性と呼び、父性は善と悪を区別して指導する傾向を示し、母性は善悪の分け隔てなくすべてを包み込む傾向を示している³⁵⁾。父親がもつ母性は、母親と同様に、子どもとの関わりのなかで育まれる³⁶⁾とされている。育児は、情緒的に安定を与える母性と外界に足を踏み出すことを後押しする父性の両性が必要であり、父親は父性的な役割のみを果たすわけではなく、母性的な役割も果たすことが育児に関わる上で重要となる。次世代の健全な育成において、伝統的な母親役割を持ち備える自覚が重要な要素となり得るが、母親だけに母性を求めるのではなく、家庭の実情や個性に合わせて性を越えた親性を発揮することが重要となる。世代を超えて伝承される可能性が高い青年期女子の母性意識は、父親と母親の母性に関わる体験が重要であり、母親だけではなく、父親が両性を発揮できる具体的な育児参加への支援が必要である。

結論

本研究では、青年期女子の母性意識の実態と母性意識と幼少期の体験との因果関係を検討することを目的とした。

青年期女子の母性意識は、伝統的な母親役割を受け入れる側面と子どもの成長を保護する側面に加え、否定的な側面を含むことが明らかとなった。大学1年生にある青年期女子は、母性意識の生成過程にあり、母性意識の発達を評価するには、一時期な評価に終始することなく、継続的な評価を指標とすることが必要であった。

青年期女子の母性意識の発達については、幼少期における母親と父親の体験が重要な規定因となり得る可能性が示され、母性と父性の両性を機能させることが重要となり得ることが示唆された。健全な次世代の育成を目指すためには、母親だけではなく、父親のもつ母性を発揮するための支援が必要であることが示唆された。

研究の限界と今後の課題

本研究は、サンプル規模が小さく仮説探求的なレベルを超えないため、サンプル規模を拡大した調査を実施する必要がある。また青年期女子の母性意識と幼少期の体験の関連を検討するためには、大学1年生女子だけではなく、母親になる可能性をより具体的にイメージできる社会人にある青年期女子を対象に選定するなどの継続的な評価が必要となる。さらに、男性の育児参加の重要度が増加している現代においては、男性の母性に関わる意識や性別役割意識の照合が重要であり、男性を対象とした調査を検討していくことが必要となる。

なお、本研究で使用した母性理念判定尺度、乳児接触体験質問紙は、20年前に作成された尺度であるため、現代の青年期女子の母性意識を評価するには妥当性の検討が必要であった。現代の青年期女子の母性意識に対応するためには、質的研究との併用などが必要となる。

今後は、これらの点を基にさらに研究を展開していくことを課題としたい。

本研究は、平成24年度九州看護福祉大学大学院看護学専攻(実践看護学分野：地域看護学領域)に提出した修士論文「青年期女子のダイエット行動と母性意識の関連」で収集したデータを使用した。また、本研究で使用したデータは、女性心身医学会「青年期女子の母性意識とダイエット行動の関連」で使用したデータの一部である。

文献

- 1) 内閣府：平成27年度版 少子化社会対策白書 第1部 少子化対策の現状と課題 第1章 少子化の現状 2015
〔last access 2017.5.7〕。
<http://www8.cao.go.jp/shoushi/shoushika/whitepaper/measures/w-2015/27pdfgaiyoh/pdf/s1-1-1.pdf>
- 2) 八重樫牧子, 小河孝則, 田口豊都：乳幼児を持つ母親の子育て不安に影響を与える要因：子育て不安と児童虐待の関連性。厚生労働省の指標, 2008；55(13)：1-9
- 3) 川井尚：育児不安：子ども虐待予防も視野に。小児保健研究, 2004；63(増刊号)：149-151
- 4) 厚生労働省：児童虐待の現状 平成26年度児童相談の状況について 2 児童虐待相談の新規認定件数(2) 主な虐待者(児童相談所) 2014
〔last access 2017.5.7〕。
http://www.pref.shimane.lg.jp/education/child/kodomo/gyakutai/jidouguyakutaitoukei.data/H26_child_guidance.pdf
- 5) 厚生労働省：乳児家庭全戸訪問事業ガイドライン。1999。
〔last access 2017.5.7〕。
<http://www.mhlw.go.jp/bunya/kodomo/kosodate12/03.html>
- 6) 厚生労働省：養育支援訪問事業ガイドライン。1999。
〔last access 2017.5.7〕。
<http://www.mhlw.go.jp/bunya/kodomo/kosodate08/03.html>
- 7) 厚生労働省：子育て支援拠点事業の概要。1999。
〔last access 2017.5.7〕。
http://www.mhlw.go.jp/file/06-Seisakujouhou-11900000-Koyoukintoujidoukateikyoku/kyoten26_4.pdf
- 8) 井上輝子：新版女性学への招待。有斐閣, 東京。2003：114-116。
- 9) 厚生労働省：男女雇用機会均等法。1985。
〔last access 2017.5.7〕。
<http://www.mhlw.go.jp/general/seido/koyou/danjokintou/danjyokoyou.html>
- 10) 内閣府：男女共同参画社会基本法。2009。
〔last access 2017.5.7〕。
http://www.gender.go.jp/about_danjo/law/kihon/9906kihonhou.html#anc_top
- 11) 世界人口白書：「共通の理解を求めて－文化・ジェンダー・人権」, 43-54, 200。
〔last access 2017.5.7〕。
<http://www.unfpa.or.jp/cmsdesigner/data/entry/publications/publications.00009.00000006.pdf>
- 12) 内閣府：男女共同参画白書 平成27年度版 第2章 女性の活躍と経済社会の活性化 第1節 就業をめぐる状況 共働き世帯の増加 2015。
〔last access 2017.5.7〕。
http://www.gender.go.jp/about_danjo/whitepaper/h27/zentai/pdf/h27_genjo2.pdf
- 13) 石川祐子, 上甲廣文, 光宗勝次, 篠崎美幸, 山上博彦, 山本千鶴子, 渡部美知子：学校における性教育の指導に関する調査・研究－現状と課題－。愛知県総合教育センター平成17年度研究紀要, 2005；102-108
- 14) 新道幸恵, 和田サヨ子：妊娠褥婦の母性意識の形成とその援助－母親役割取得過程との関連において。助産婦雑誌, 1987；41(1)：77-81。
- 15) 平井信義：母性愛の研究。同文書院, 東京。1981；56-165。
- 16) 花沢成一：母性心理学。医学書院, 東京。1992；9-60。

- 17) 花沢成一：母性の獲得. 依田明編, 性格心理学講座 2 新講座 性格形成. 金子書房, 東京. 1989; 156-165.
- 18) 陳省仁：新生児・乳児「泣き」について：初期の母子相互作用交涉及び情動発達における泣きの意味. 北海道大学教育学部紀要, 1986; 48: 187-206.
- 19) 武藤八重子, 伊藤葉子：保育領域における情意の指導と評価(3) 加齢と指導の影響. 日本家庭科教育学会誌, 1988; 30(1): 39-46.
- 20) 中西雪夫, 牧野カツ子：高校生の『親になることの準備状態』と保育教育『準備状態』の形成に影響を与える要因. 日本家庭科教育学会誌, 1989; 32: 55-59.
- 21) 花沢成一, 松浦純：男女青年における対児感情と乳児接触経験との関係. 日本教育心理学会 第 28 回総会発表論文集, 1986; 356-357.
- 22) 杉山智春：母性意識および次世代育成意識に影響する要因の検討：父親・母親・祖父母・近隣の人々との体験と保育所での体験. 母性衛生, 2010; 50(4): 543-551.
- 23) 厚生労働省：「健康日本21」(総論). 2000.
[last access 2017.5.7].
http://www1.mhlw.go.jp/topics/kenko21_11/s0.html
- 24) 松下姫歌・村上智美：母性理念の構造に関する検討－母性理念質問紙の分析を通して－. 広島大学心理学研究, 2007; 7: 315-323.
- 25) 松下姫歌, 村上智美：母性理念の概念的構造に関する再検討－母性理念質問紙と役割指向性尺度・DSQ42を用いて－. 広島大学大学院教育学研究科紀要, 2009; 3(58): 151-158.
- 26) 花沢成一, 吉田真紀：女子青年における最近13年間の母性理念の推移. 日本教育心理学会総会発表論文集, 1995; 37: 454.
- 27) 飯島婦佐子：家族システムと幼児の自己の発達：父親の性役割観, 母親からみた父親のソーシャルサポートと母性意識. 性格心理学研究, 1997; 6(1): 50-64.
- 28) 青木まり：女性青年における女性性発達の様相(2). 日本教育心理学会第29会総会発表論文集, 1987: 244-245
- 29) 濱耕子：母性看護実習と受講する学生の対児感情の変化と特徴. 三重看護学誌, 2007; 9: 83-88
- 30) 内閣府大臣官房政府広報室：平成28年度男女共同参画社会に関する世論調査2016.
[last access 2017.6.28]
<http://survey.gov-online.go.jp/h28/h28-danjo/2-2.html>
- 31) 柏木恵子・若松素子：「親になる」ことによる人格発達：生涯発達の視点から親を研究する試み. 発達心理学研究, 1994; 5(1): 72-83.
- 32) 平山聡子：中学生の精神的健康とその父親の過程関与との関連：父母評定の一一致度からの検討. 発達心理学研究, 2001; 12(2): 99-109.
- 33) 加藤邦子・石井クンツ昌子・牧野カツコ・土谷みち子：父親の育児かかわりおよび母親の育児不安が3歳児の社会性に及ぼす影響：社会的背景の異なる2つのコホート比較から発達心理学研究. 2002; 13(1): 30-41.
- 34) 大野祥子：父親の育児関与の発達の意義. 世界の児童と母性, 2008; 65: 23-27.
- 35) 河合隼雄：母性社会日本の病理. 中央公論社, 東京. 1976: 9-13.
- 36) 大元千種：父親の育児参加とその支援について. 筑紫女学園大学・筑紫女学園大学短期大学部紀要, 2010; 5: 187-196.